

ヘンリー・フィールディングの小説

——『トム・ジョーンズ』の本質 (IV-2) ——

児 玉 啓 介

1. は じ め に

今回の論文は『トム・ジョーンズ』の第6巻から第9巻までを例証するが、第6巻は14章から、第7巻は15章、第8巻も15章、第9巻は7章から成り、合計51章から成っている。

今回登場する主な人物は10人で、トム・ジョーンズは51章中34章に登場し、ソフィアは19章に、ウェスタン氏は12章に、パートリッジも12章に、オールワージー氏は10章に、ウェスタン夫人は9章に、ブリフィル氏も9章に、丘の男は7章に、オナー夫人は6章に、ウォーターズ夫人も6章に登場する。

登場人物の中でトム・ジョーンズが一番多く登場するのは当然であるし、ソフィアが次に多く登場するのも当然であるが、ソフィアは第8巻の3章まで現われて、あとは姿を見せなくなる。ただし、第8巻の5章にジョーンズとの関係で一瞬現われるが、すぐ消えてしまう。物語の性質上、男の主人公と女の主人公は交互に登場したり、同時に登場したりするものであるが、ある章から女の主人公が突然姿を現わさなくなるのは何か作者の意図があるからであろう。

もう一人「丘の男」なる奇人変人が第8巻10章から第9巻2章まで登場するが、この人物が『トム・ジョーンズ』という小説全体にどんな意味をもつかわからないし、小説の構成とか展開にどんな影響を与えるのか今のところよくわからないので、私の推測はひかえることにする。

2. 登場人物とその人となり

(1) トム・ジョーンズ

(a) ソフィアとウェスタン夫人が話をしている場面でソフィアが言う。

「いや、私は白状します。あんなに完璧なものをいろいろもっている人を私は知りません。とても勇敢で、しかも優しく、とても機知があつて、しかも嫌味がなく、とても人間味があり、とても丁寧で、とても上品で、とてもハンサムで。こんないろんな点を比べると、あの人のいやしい生れがどんな意味があるのでしょうか」と。これに対しておばが言う。「いやしい生れ？ どういう意味？ ブリフィル氏がいやしい生まれだつて？」と。ソフィアはこの名前を聞いてとっさに青くなり、かすかにくりかえす。要するに、ソフィアはジョーンズ氏のことを、おばはブリフィル氏のことを考えながらしゃべっていたのである。ソフィアが言う。「ジョーンズ氏のことを私は考えていたの。あの人以外は知りません」と。これに対しておばは「あなたが愛しているのはジョーンズ氏であつて、ブリフィル氏ではないの？」と言う。「じょうだんはやめてください。もしおばさまがまじめだとすれば、私はこの世で一番みじめな女です」(6-5)。

(b)召使いのオナーとソフィアが話している場面でオナーが言う。

「あの人は世界で一番もっともハンサムで、一番もっとも魅力的で、一番もっともすばらしく、一番もっとも背が高く、一番もっとも礼儀正しい人だと誰もが認めなければなりません」と (6-6)。

(c)ブリフィルのジョーンズについての考えを作者は次のように述べる。

ジョーンズについてブリフィルは少しも妬みを持っていなかったし、ジョーンズが持っている性格はイギリスで一番乱暴だから、一番模範的な謙遜な女性にとって嫌なものかもしれないとブリフィルは想像していた (6-7)。

(d)上記と同じ場面で作者は述べる。

ブリフィルはジョーンズがソフィアを愛していることを全然理解していなかったし、ジョーンズが以前モリーに対して持っていた愛情に変化が起ったことを全然知らなかった (6-7)。

(e)ソフィアとオナーがジョーンズのことを話している場面でソフィアは言う。

「あの人は全く英雄的美徳を備えた人で天子のように善良な人です」と (6-13)。

(f)トムがある宿屋である客と話をしている時彼は言う。

「私はとても暴れん坊の青年でしたが、それでも一番真面目な瞬間には、心の底では本当にクリスチャンです」と (7-13)。

(g)宿屋の一室でジョーンズと散髪屋のベンジャミンが話をしている場面で作者は述べる。

友情のあらゆる告白は惨めな人に対する信頼を容易に得るものである。ジョーンズが惨めであった上に、極めて素直であったが、彼がベンジャミンの告白を全部信じて彼を胸の中に受け入れたかどうかは不思議ではない (8-5)。

(h)ジョーンズ氏について作者は述べる。

ジョーンズ氏の個人的才能についてはこれまであまり言わなかったが、彼は実際に世界で一番ハンサムな男の一人であった。彼の顔は健康の典型であるほかに、優しさと善良な性質の最も明白な特徴を持っていた。これらの特質は彼の容貌に非常に特徴的だったので、彼の眼の中の精気と感受性は正確な観察者によって感知されたかもしれないが、それほど識別力のない人の眼にはとまらなかったかもしれないし、この善良な性質が彼の顔に非常に強く描かれていたので、彼を見る人はほとんど全部それを話題にした。

彼の顔にはほとんど表現できない優美さがあるのは非常にすばらしい血色のせいであると同様に善良な性質のせいであったし、彼の顔は、もし男性的な体と物腰がなかったら、あまりに女性的な様相を与えたかもしれない。そして後者はアドーニスの性質を持っていたように、前者はヘラクレスの性質を持っていた。更に彼は活動的で上品で陽気で愛嬌がよかったし、彼のいるところではどんな会話にもいきいきさせる動物元的元気の流れがあった (9-5)。

(i)ジョーンズ氏とパートリッジが立ち寄った宿屋のお上がジョーンズについて言う。

「私があの方を最初見た瞬間、あの方はご立派な紳士のように思いました」と (9-6)。

(j)作者の自然と人間との関係並びにジョーンズについての考え。

自然はあらゆる人間の構成の中で好奇心か虚栄心を同じように決してまぜあわせてはいないが、服従させたりおさえつけたりするために、沢山の技術や努力も要求するような両方の割合、即ち、英知または育ちのよさをもつ登場人物にどんな程度にも価値するあらゆる人にとって絶対に必要不可欠なものを、自然が割当てなかった個人は恐らく一人もいないだろう。そういうわけでジョーンズは育ちのよい男とまさしく呼ばれるかもしれない（9－7）。

（2）ソフィア

（a）ブリフィルのソフィアについての考え方を作者は述べる。

ソフィアの財産とソフィアの体だけが彼の願いの対象であって、その絶対的財産をまもなく手に入れることを彼は全然疑わなかった。というのはソフィアは父親に対して完全に服従することを彼は知っていたから（6－7）。

（b）ウェスタン氏がオールワージ氏と話をしている場面でウェスタン氏は言う。

「私の一人娘、私の可哀そうなソフィーは私の心の喜びであり、私の年齢の希望と慰めのすべてであります」と（6－9）。

（c）ソフィアが16ギニーはいっている財布や時計や指輪をオーナーに持たせてジョーンズに持たせて行かせる場面で作者は述べる。

彼女の父は彼女に対して気前がよかったが、彼女は金持ちになるにはあまりに気前がよかった（6－13）。

（d）宿屋のお上さんとジョーンズが話をしている場面で、お上さんがあなたが今寝ているベッドにソフィアが寝たことがあると言った時、ジョーンズが言う。

「あの人は優しさそのもの、親切そのもの、善良そのものです」と（8－2）。

（e）宿屋の一室でジョーンズと散髪屋のベンジャミンが話をしている時、ジョーンズがソフィアについて告白する。

「世間が縁組みをさせることのできないそんな女。どんな眼もあんなに美しいものを見たことがないが、あれは全くとるにたりない点です。あの物わりのよさ、あの善良さ。ああ、私は彼女を永遠にほめることができるし、それでも彼女の長所の半分を省略しましょう」と（8－5）。

（3）オールワージ氏

（a）ウェスタン氏が娘のソフィアとブリフィル青年との結婚の申し込みをする場面で、オールワージ氏は世俗的利益のある予期しない突然の知らせを聞いて心が揺れ動くような人ではなかった。彼の心は男にふさわい、クリスチャンにふさわしい哲学で本当にきたえられていた。快楽と苦悩はすべて、喜びと悲しみすべてより絶対に優っているふりをしなかったが、同時にあらゆる偶然の衝撃によって幸運の女神のあらゆるほほえみあるいはあらゆるしかめつらによって、心を乱されたりいらだったりすることはなかった。従ってウェスタン氏の申し込みを眼に見えるような感情なしに、あるいは顔色の変化なしに受け入れた。結婚は彼が真面目に望むものであると言ってから、若い女性の美点について正しい賛辞を言い、その申し出が幸運と

いう点で有利であると認め、ウェスタン氏がオールワージ氏の甥について述べた良い意見に対して感謝してから、もしその若い二人がお互いに好きあっているなら、この話がうまくまとまることを願っていると最後に言った（6－3）。

オールワージ氏が言った最後の言葉（その若い二人が好きあっているなら）は『トム・ジョーンズ』という小説の伏線のひとつになる。

(b)ブリフィルがウェスタン氏にソフィアの結婚話をもちかけられたのに対して快い返事をしなかった場面で作者は述べる。

オールワージ氏は生来気迫の人であつたし、彼の現在の落ちつきは彼の性質の中に本来あるものからではなくて、真の英知と哲学から生じたものであつた。というのは彼は青年時代に燃える情熱を持っていたし、美しい女性と恋のために結婚したのだったから。従って彼は甥の冷たい（まだ結婚のことは考えていないという）返事が大いに気に入らなかったし、ソフィアの称賛を始めざるを得なかったし、若者の心が何かもっと大きな愛情によって守られていないなら、その心がそんな魅力に対して難攻不落であることに不可解の念を表わさざるを得なかった（6－4）。

(c)オールワージ氏の習慣について作者は述べる。

ある感情で誰かを処罰したり、召使いを追い出したりするようなことは決してしないのが彼の習慣であつた（6－9）。

(4)ブリフィル氏

(a)ブリフィルの性質について作者は述べる。

ソフィアのいろいろな魅力はブリフィルに全然印象を与えなかったし、彼の心が前以って何かに奪われていたのでもなかったし、そうかといって美の感覚が全くなかったのでもなく、女性に対して嫌悪感を持っていたのでもなかったが、彼の欲望は生まれつき中ぐらいで、哲学によっても研究によっても何かほかの方法によっても欲望を容易におさえることができたし、私達がこの第1章で取扱ったあの情熱についても彼の体全体の中にその情熱を微塵も持っていなかったのである（6－4）。

(b)ソフィアと侍女のオナーが話している場面でソフィアがブリフィルについて言う。

「私の父は私が軽蔑し憎んでいる男と私を結婚させようとしているんです。…彼の名前は私の舌には毒なの」と（6－6）。

(c)ウェスタン氏がソフィアに会ってソフィアとブリフィルの結婚のことでソフィアを元気づける場面でブリフィルについて言う。

「ブリフィルは元気な青年だ」と（6－7）。

(5)ウェスタン夫人

(a)ウェスタン夫人の性格などについて作者は述べる。

ウェスタン氏の妹（ウェスタン夫人）は彼と違った気性の夫人であつた。彼女は宮廷あたりで生活して、世間を見たのだった。だから彼女はいわゆる世間が大抵伝えるすべての知識を身

につけていたし、風俗、習慣、儀式、流行の完璧な女であった。彼女の博学はここでとどまらなかった。彼女は研究によって自分の心をかなり改善したし、現代の戯曲、オペラ、オラトリオ、詩、ロマンスすべてを読んだだけでなく（このすべての批評家でもあったが）、ラピンの英国史、イーチャードのローマ史、沢山のフランスの回顧録を経験していたし、これに加えて過去20年以内に出版された政治的パンフレットやジャーナルを大抵読んでいた。これから彼女は政治における有能な技術を身につけていたし、ヨーロッパ事情に関しては学者的に議論することができた。更に愛（amour）の教義には目立ってすぐれていたし、誰と誰が一緒にいるかということとを誰よりもよく知っていたし、知識の追究が彼女自身の身近の出来事によって変えることはなかったのも、容易に身につけた知識だった、というのは彼女は特別の性向もなかったし、その性向が悪事に誘われることもなかったからである。これは実際にありそうなことである、というのは彼女の男性的な体つきは身長6フィート近くあったし、更に態度や学問が加味されていたので、恐らく異性は、彼女がペティーコートを着ていても、女性という点でも、彼女を尊敬はしなかっただろう。しかしながら、彼女は物ごとを科学的に考えていたので、ほほえみや色目やちらりと見るしぐさに加えて、すてきな夫人たちが誰かを激励したり、好みを隠したりする時に使うすべての技術（上流社会で現在行われている技術）を完全によく知っていた。とはいってもその技術を全部実行したことはこれまでになかったが。全体を要約すると、どんな種類の偽装も気取りも彼女の注目を逃れることはなかったが、正直な性質の明白で簡単な働きに関しては、今までひとつも見ることがなかったので、その働きをほとんど知ることはできなかった（6-2）。

(6)ウェスタン氏

(a)ウェスタン氏のソフィアについての態度を作者は次のように述べる。

ソフィアは翌日の朝、食事の時前の晩と同じ真面目な顔つきをしていて、朝食の席からいつもより早く引き上げた。父と叔母を残して。郷土は娘の性質のこのような変化に気づかなかった。実は、彼は政治屋的なところが幾分あるし、郡のために2回選挙に立候補したが、あまり観察力はない男だった（6-2）。

(b)ウェスタン氏の家でブリフィル氏とソフィアが見合いをしている時、ウェスタン氏が外で待っている場面で作者は述べる。

ウェスタン氏は恋人ブリフィル氏が娘のところから出て来るのを注意深く待った。彼はブリフィル氏の見合いがうまくいったために非常に上気しており、娘に非常に魅了されており、彼女が彼を受入れたことにブリフィル氏が非常に満足しているのにウェスタン氏は気づいて、大広間をはね回り踊り始め、沢山のおどけた仕草で彼の喜びの異常さを表わし始めた。というのは彼は自分の厳しい感情を全然抑えることができなかったし、彼の心の中でどんな時でも優勢であるものが彼を最も狂気じみた極端にかりたてたから（6-7）。

(7)ベンジャミン

(a)ジョーンズが宿屋にいる時やって来た散髪屋について作者は述べる。

この散髪屋はベンジャミンちゃんという愛称でよばれていたが、ずいぶん変っていてユーモアのある奴だった。このために顔をピチャピチャたたいたり尻をけったり骨折したりというちょっと異常なことがあった。これは彼にとっては冗談なのだが、誰も理解しなかったし、この悪い癖は治らなかった。そのため彼はひどい目にあったが、彼が冗談を考え出す時はいつでも、人、時間、場所に関係なく悪事から確かに解放された（8-6）。

(8) ナニー

(a) ジョーンズの宿屋の女中について作者は述べる。

彼女が恋人の眼で（彼を）見たとすれば、彼女にとってはさいわいであった。というのは5分してジョーンズを激しく好きになり、彼女は自分の情熱のためにその後何度も溜息をつくことになった。このナニーはことのほかきれいだったが、全くのはずかしがりやであった。というのは男の給仕人や近所の農家の青年を寄せつけなかったが、わが主人公（ジョーンズ）のきらきら輝く眼が一瞬にして彼女の氷を全部溶かしてしまった（8-4）。

(9) サプル

(a) ウェスタン氏とジョーンズが意見の対立で一触即発の状態になった場面で、そばにいたのが牧師のサプル氏だったが、彼は非常に頑強な男だったから、その場は一応おさまった（6-9）。

3. 主要な語とコンテキスト

(1) 善良な, よい (good)

(a) オールワージ氏について作者は述べる。

結局、その善良な人（オールワージ氏）は彼の甥がソフィアに対して何か反対を持っているどころか、真面目で徳の高い心の中では友情と愛の確かな基礎である彼女へのあの尊敬を持っているということに満足していた（6-4）。

(b) ソフィアとウェスタン夫人について作者は述べる。

ソフィアが自分の部屋にいて本を読んでいた、その時彼女の叔母（ウェスタン夫人）がはいって来た。夫人を見た瞬間、力強く本を閉じたので、その善良な夫人は彼女にきかないわけにはいかなかった。「私に見せたくない本なんて一体どんな本?」「いやいや、おばさま、私が読んだと白状するのに恥かしく思ったりびくびくするような本ではありません。最近流行の若い女性作家の作品で、彼女の真実の (good) 理解力が同じ女性に名誉を与え、彼女の善良な心が人間性に名誉を与えているのです。」ウェスタン夫人は本を取り上げて、すぐ投げ捨てて言う。「なるほどこの作家は良家の出ですか、みんなが知っているような人ではありません。私は今まで読んだことはありません。というのはそれにはあまり内容がないと一流の (best) 評論家が言っているからです。」「おばさま、あえて反対はしません。一流の (best) 評論家に対して。でもその作品の中には人間性があふれているように見えますし、いろんなところで本当の優しさ、肌ざわりのよさがあるので、私は何度も涙をこぼしました」（6-5）。

(c)ブリフィルがソフィアと別れたあとすぐ、ウェスタン氏が娘の様子を伺いに来た時も善良な郷土であったし（6－8）,

(d)ソフィアのジョーンズに対する愛を秘密にしておくウェスタン夫人は約束したのだが、その条件を絶対に破ったと解釈したのは姪（ソフィア）の異常なほどの振舞いがあったからである。その時の夫人も善良な夫人であったし（6－9）,

(e)ウェスタン氏がソフィアの助けを求めて、ウェスタン夫人や家中のものみんなを呼んでソフィアを助けさせ快復させたが、その騒動のあと、夫人が部屋を出て行く時、兄に対する優しい忠告を残して行ったが、その時の夫人も善良な夫人であった（6－9）。

(f)上記と同じ場面で、

その郷土（ウェスタン氏）はこの思いやりのある（good）忠告を理解しなかった（6－9）。

(g)夕食後オールワージー氏がジョーンズに説教をしている場面で、オールワージー氏は言う。

「お前の行為には叱るところはないが、お前に対して今まで優しく尊敬して振舞って来たあの善良な青年（ブリフィル）をお前がひどく扱ったことだけは悪い」と（6－9）。

(h)ウェスタン氏の亡くなった妻の描写。

自分の意志に反して優しい父によって結婚させられたのだが、夫人はよい妻というよりむしろよい召使いであった（7－4）。

この逆の考え方が『トム・ジョーンズ』という小説の伏線の一つである。

(i)ソフィアとオナーが家を出ること、特にソフィアが父の意志（ブリフィルとソフィアとの結婚）に従うことは同意した場面で作者は述べる。

この同意が善良な郷土（ウェスタン氏）を大いに喜ばせたので、彼はしかめっつらをほほえみに変え、脅しを約束に変えた。即ち彼はすべての魂が彼女の魂に包まれている、彼女の同意が彼を一番しあわせな人間にしたと彼は断言した。これから彼は大きな銀行券を彼女の小物入れに押しこんで、一番優しい方法で彼女に頬ずりをし愛撫した。その間彼の愛情の優しい対象に対してほんの少し前まで炎と怒りを放っていた彼の眼から喜びの涙がこぼれ落ちた（7－9）。

(j)ジョーンズがブリストルへ行く道で迷っていた時、通りかかった質素で顔立ちのよい男（クエイカー教徒）が今夜は歩くのをやめて近くの宿屋に泊ることを薦める場面で彼は言う。

「すぐ近くにとっても信用できるよい宿屋がありし、そこでのもてなしはよいはずです」と（7－10）。

(k)宿屋のおかみさんとジョーンズが話をしている時、オールワージー氏の話が出るが、あの立派で善良なオールワージー氏を知っているのですかとジョーンズは聞く（8－2）。

ある場面で初めて話題になる時は大抵（good）という形容詞がつくようである。

(l)宿屋でジョーンズと散髪屋のベンジャミンの話に2度出て来るお上さんはいずれも善良な女性である（8－4）。

(m)上記と同じ場面でパートリッジがジョーンズへ言う。

「あなたに会う前の晩に夢を見たのです。椅子につまづいたのですが、けがはしませんでした。そのことで何かよいことが私に向っているとはっきり教えてくれましたし、ゆうべまた夢を見ましたが、ミルクのような白い雌馬に乗ってあなたの後を行くところでした。これは大変すばらしい夢で、沢山の好運 (good fortune) の前兆です」と (8-4)。

(n)上記と同じ場面でパートリッジはつづける。

「更に約束しますが、その原因 (ジョーンズが家を追い出された原因) に対して誰にも負けないぐらいよい性向を私は持っていますし、あなたのお伴をすることを許して下さいでも下さなくても私は行きます」と (8-6)。

(o)丘の上の一軒屋の老女の中にはいるように言われた場面で、パートリッジが限りなく喜んだことに、彼を歓迎するために準備されたこうこうたる (good) 暖炉の火を彼は発見したのだった (8-10)。

(p)上記と同じ場面でジョーンズが老女に呼びかける言葉は ‘good woman’ (おかみさん) である (8-10)。

(q)上記と同じ場面で主人と妻が話している時、ジョーンズについて彼女は言う。

「あの人は立派な紳士です。きっと、私があの人を中に入れたので、あなたは腹を立てたでしょうし、あの人が紳士であっても、もう少しでここへ死にそうだとすることを月明かりで見なかったら、中には入れなかったのですが。あの人をここに送って私にそうさせたのは確かに何か善良な天使だったにちがいません」と (8-10)。

(r)上記と同じ場面での主人の話。

彼の父は用心深く勤勉で非常に善良な百姓だったので、極悪意地悪の妻が彼の家庭的平穏を邪魔しなかったら、のんびりした安楽な人生を送ったかもしれない (8-11)。

(s)上記と同じ場面で作者は述べる。

彼は二人兄弟の弟であった。父親は彼ら二人に立派な教育を授けようと考えていた (8-11)。

(t)上記と同じ場面でのパートリッジの話。

パートリッジが生まれた教区にブライドルという百姓がいて、その息子のフランシスは善良で、希望に満ちた若者だった。日曜日には必ず教会へ行く善良な若者であり、教区全体で一番上手な (best) 聖歌の歌い手だった (8-11)。

(2)ころ (mind)

(a)真理の発見者と金の発見者の違いについて作者は述べる。

真理を探す場合にも金を探す場合にも両方に用いられる方法はほとんど同じである。即ち、きたない所を探したり、かき回して探したり、調べたりすることだが、実際、前者の例ではすべての場所で一番きたない所である悪い心を探すことである (6-1)。

(b)真理の発見者について作者は述べる。

真理の発見者は自分自身の心を便所と同一視して、その中には神聖なものの一筋の光もないし、美德といったもの；善なるもの、美なるもの、愛すべきものは何もないので、すべての被

造物の中にはそんなものは存在しないと、正々堂々と正直に論理的に結論づけている(6-1)。

(c) 作者は心と愛の関係について以下4つのことを認める(ただし、i だけが心についてであって、ii, iii, ivは愛についてであるが、いずれも関連しているので一緒に紹介する)。

(i) 多くの心、恐らく今話題にしている哲学者の心は愛という強い感情の痕跡も持っていないということ。

(ii) 愛と一般的に呼ばれているもの、即ち、人間の白い優美な肉で強烈な欲を満足させる願いは作者が考えているパッションでは決してないということ。これは実際もっと適当に言えば、渴望(hunger)であって、どんな大食家も自分の欲望に愛という言葉をあてはめて、これこれの料理を愛していると言うのを恥とも思わないように、この種の愛好家(lover)はこれこれの女性を渴望している(HUNGERS)ということ。

(iii) 作者が擁護している愛は私達の欲望の中で一番大きいものと同様に愛そのものの満足を探し求めるということ。

(iv) この愛は、異性に対して働く時、その完全な満足に向かって渴望の助けを呼び入れることがあり、愛はその渴望を減ずることはないので、欲望だけから始まったものよりほかの情緒を今まで受け入れたことのない人によって想像できないぐらいに愛の喜びを高めるということ(6-1)。

(d) ウェスタン氏とウェスタン夫人とソフィアが朝食をとっている場面で、
ウェスタン夫人は彼女の驚くべき聡明さでソフィアの心の中の何かを発見していた(6-2)。

(e) オールワージー氏はソフィアについて、
彼女の心も体も両方のもつ非凡な天職の才能を大いに称賛していた(6-3)。

(f) ブリフィルがソフィアと結婚するのは、
絶対的財産(property)即ち彼女の財産(fortune)と体をまもなく手にすることを全然疑っていなかったからだし、ウェスタン氏の心が二人の結婚に非常にまじめに傾いていたからである(6-7)。

(g) ブラック・ジョージについて作者は述べる。

ブラック・ジョージは財布を受け取ると飲み屋の方へ出かけたが、その途中、この金を持っているべきかどうかという考えが彼に起こった。しかしながら、彼の良心はこの提案をすぐ始めて、彼の恩人(ジョーンズ)に対する忘恩を非難し始めた。これに対して彼の貪欲が答えた。彼が可哀そうなジョーンズから500ポンドを奪った時この問題を考えるべきだったと。もっと重要なことに、静かに沈黙していながら、このつまらないことに何らかの自責の念のふりをすることは、全くの偽善ではなくても不合理であると。これに対して良心は品物が渡されたこの場所のように絶対的信頼を裏切ることと、以前の場合のように見つかったものをあからさまに隠すこととの区別をしようとした。貪欲はただちにこれをからかって相違なしの区別と呼び、名誉と美德の見せかけがどんな例においてもいったん断念される時、次の機会に名誉と美德に

かえる先例はないと絶対に主張した。要するに、可哀そうな良心はこの議論では確かに敗北したのだった、もし、恐怖が良心の援助に踏みこんできて、この二つの行為の本当の区別は名誉の程度にあるのではなく安全の程度にあるということをねばり強く主張しなかったならばである。というのは500ポンドを秘密にすることはあまり危険な問題ではなかったが、16ギニーを持っていることが発見されやすい一番危険なことだったからである。恐怖のこの友情あるあと押しで、良心はブラック・ジョージの心の中で完全な勝利を納め、彼の正直に2・3のお礼を述べたあと、ジョーンズにその金を手渡すことにした（6-13）。

(h)ブリフィルとソフィアが会っている場面で、

ソフィアの心に影響を与えたいろいろな悩みが彼女の美しさをそこなうどころか、増大させた。というのは彼女の涙が彼女の眼に輝きを加え、胸は溜息と共にますます高くもり上がったからである。（7-6）。

(i)ソフィアと女中のオーナーがウエスタン家を出るということがばれて、結局、ウエスタン氏に追い出されることになるが、その時ウエスタン氏は怒ってオーナーをブライドウェル懲治監に入れると騒ぐ。しかしいろいろな事情で家出を許されることになった時、オーナーの心の中にいろいろな恐ろしい考えを呼び起こしていたブライドウェルという言葉は少し消えてしまって、彼女は本来の態度を取り戻すことになった（7-9）。

(j)上記と同じ場面で、

ソフィアが父親に与えたこの上もない幸福感は彼女の心に強い印象を与えた（7-9）。

(k)真冬の夜中グロスターからウスターへジョーンズとパートリッジが歩いていた時、満月が出て来た場面でパートリッジが、

「この月があなたの鏡であればいいのに、そしてソフィア・ウエスタン嬢がその前に座っていればいいのに」と言ったのを受けて、ジョーンズが言う。「恋人の考え以外に心に決して浮かばなかった考えだったのに何ということをも」と（8-9）。

(l)丘の上の一軒家の主人の話。

哲学と宗教は心の運動と呼んでもいいし、これが乱れると、哲学も宗教も病気の体にとって運動と同様に健康的です。哲学も宗教も運動と類似した効果を本当に生み出します。なぜなら心を強くし固くするからです（8-13）。

(m)ウォーターズ夫人について作者は述べる。

彼女の四肢は実に力強さと機敏さに満ちあふれていたし、彼女の心は精神（spirit）と同様に生き生きしていたので、彼女の機敏な恋人と同じ歩調で完璧に歩くことができた（9-7）。

(3)ころ（heart）

(a)ブリフィルがソフィアに会ったあと、

ロマンティックな恋人たちが必要とする女の心を全く絶対に所有することについて、その考えは彼の頭には全然浮かばなかった。彼女の財産と彼女の体が彼の願いの唯一の対象であった。（6-7）。

(b)ソフィアの部屋にジョーンズが偶然はいって来たが、泣きぬれたソフィアが「出て行って私を一人にして」と言ったのに対して、ジョーンズは言う。

「私にそんな残酷な命令をしないで下さい。私の心はあなたの出血している唇より早く出血しているんです」と(6-8)。

(c)上記と同じ場面でジョーンズは言う。

「ソフィア、私に話をして、私の出血している心を慰めて」と(6-8)。

(d)オールワージー氏などがある夕食の席で、

ジョーンズの心はあまりに重くて彼に食べることを許さなかった(6-11)。

(e)上記と同じ場面でオールワージー氏の非難に対して、

ジョーンズの心はほとんどすでにこわれていたし、彼の元気(spirits)は落ちこんでいたので、自分を弁護することは何もいえなかった(6-11)。

(f)ソフィア宛のジョーンズの手紙の中で彼は言う。

「私の手紙の中の首尾一貫しない点や不合理な点を許して下さい。というのは一言一言がどんな言葉も表現できないほど満ちあふれた心から流れ出て来るものだからです。」と(6-12)。

(g)上記と同じ手紙の中でジョーンズは言う。

「私の苦しみを全部あなたに言うつもりはありません。あなたの心の善良さと優しさを知っているからです」と(6-12)。

(h)ソフィアからジョーンズ宛の短い手紙の中の最後のところで彼女は言う。

「このことだけは信じて下さい。最後の暴力以外に何も私の手や心に悲しみを与えないということを」と(6-12)。

(i)ソフィアが家を出ることになった時のウエスタン氏の振舞いについて作者は述べる。

その後半(しかめつつらをほほえみに、脅しを約束に変えたことなど)がソフィアの優しい心に非常に強い影響を与えたので、思慮深い叔母の詭弁全部が全部、父の脅し全部が全部彼女の頭に一度ももたらしたことの無い一つの考えを示唆した(7-11)。

(j)ジョーンズとウォーターズ夫人がいる場面で作者は述べる。

「...ジョーンズ氏の心をとらえるために今用いられた武器は何だったのか」(9-5)。

(k)上記と同じ場面で、

「誰も感動なしに聞くことのできなかった溜息、10数人のしゃれ男を吹き飛ばすに十分な溜息は、非常に柔らかく、非常に甘く、非常にやさしかったので、媚びる態度は、もし泡立つビール音によって幸いにわが主人公の耳から追ひ払われていなかったら、彼の心へ巧妙に近づいていったにちがいない」(9-5)。

(l)上記と同じ場面で、

「彼女はただ彼を引きつけようとして、彼の眼を開けさせようとしたのだが、その眼を通して、彼女は彼の心をびっくりさせようとしたのだった。(9-5)。

(m)上記と同じ場面で、

「実際に彼の眼をあけようとしたのは、彼の眼を通して彼女は彼の心をびっくりさせるつもりだったのだが…」(9-5)。

(n)上記と同じ場面で、

「その巧妙な美女は非常にこっそりと気づかれずに彼女の攻撃を行っていたので、彼女が再び敵意の行為を始める前にわが主人公の心をもう少しで征服するところだった。真実を告白すれば、ジョーンズ氏は美しきソフィアへの誓いを正しく考えもしないで、ある種のオランダ式防御を維持していてこっそりと守備隊を配置していたのだった。要するに、なまめかしい会見が終わり、夫人が首から不用意にハンカチを落として、忠誠の砲台のおおいをはずすと、ジョーンズ氏の心は全くとりこにされて、麗しい征服者は彼女の勝利のいつもの成果を楽しむのだった」(9-5)。

(o)ウォーターズ夫人のジョーンズについての考えを作者は次のように描写する。

ジョーンズの美しさが彼女の眼を魅了したが、彼女は彼の心を見ることができなかったのも、心についての関心を彼女自身全然示さなかった。(9-6)。

(4)愛 (love) ・愛情 (affection)

(a)愛について哲学者に認めてもらいたい作者の5つの要望。

(i)人間のいくつかの(沢山の私は信じている)胸の中には他人のしあわせに貢献することによって満足させられる親切で善良な性質があるということ。

(ii)この満足の中だけに、例えば、友情の中に、親としての愛情 (affection) ・子としての愛情の中に、実際に一般的博愛の中に、大きくてこの上もない喜びがあるということ。

(iii)そのような性質を愛と呼ばなければ、それに代わる名前はないということ。

(iv)そのような純粋な愛から生じる快樂が愛の願いの助けによって高められて甘くされることがあっても、快樂だけは存在できるし、愛の願いの介在によって破壊されるのではないということ。

(v)若さと美しさが願いに対する動機であるように、尊敬と感謝が愛にふさわしい動機であるし、そのような願いは、老齢や病気が愛の対象に追いつく時、当然止むかもしれないが、老齢や病気は愛に対して何の影響も持つことはできないし、愛の根底のために感謝と尊敬をもつあの気持ちや感情を善良な心からゆり動かしたり、除いたりすることはできないということ(6-1)。

(b)愛に関する章の最後で作者は言う。

愛のあなた(読者)に対する印象を取扱うことは、生まれつき目の不自由な人に対して色を論じることと同様に不合理に違いない。というのは恐らくあなたの愛についての考えは目の悪い人が真紅の色についてかつて抱いたといわれる考えと同じぐらい不合理であるかもしれないし、真紅の色は彼にとってトランペットの音に大変似ているように思われたし、愛は恐らく一皿のスープあるいはロースト・ビーフのサーロインに大変似ているかもしれない(6-1)。

(c)ウエスタン氏、その妹(ウエスタン夫人)、娘(ソフィア)、青年ジョーンズ、牧師(サプル)

がウエスタン氏の家で夕食をしていた時、ジョーンズについて言えば、

愛が彼の心をすっかりとらえていたが、わが主人公はオールワージー氏の快復のことを考えたり、彼の恋人がいたりして、彼の心は高ぶっていたので、他の人たちと同様に上機嫌であった（6-2）。

(d)ソフィアがウエスタン夫人から説教される場面で夫人は言う。

「上流社会では愛は今では全く笑われるし、女は結婚を考えればよいし、男は公的信頼のある仕事をすればよい」と（6-13）。

(e)ウエスタン氏とウエスタン夫人がソフィアについて話をしている場面で夫人は言う。

「ソフィアが愛やたわごとのロマンティックな考えを学んだのはあなたと一緒に家で生活したからです」と（6-14）。

(f)クェイカー教徒が娘のことをジョーンズに話している場面で彼は言う。

「娘は愛のために結婚したのだから、できるなら愛を食べて生きさせよ。愛をマーケットに持って行かせよ。誰が愛を銀貨にかえるかを見させよ。…私はいつも愛に反対して娘に説教をしたし、愛は全く愚かで邪悪であると1000回以上も話したんです」と（7-10）。

(g)丘の上の一軒家の主人の話。

「あの一番優しい、一番激しい情熱である愛を味わった」と（8-13）。

(h)上記と同じ場面で、

「なるほど哲学は私たちをより賢い人間にしますが、キリスト教は私たちをよりよい人間にします。哲学は心を高め固くしますが、キリスト教は心を和らげ甘くします。前者は私たちを人間的賞賛の対象にしますが、後者は私たちを神の愛の対象にします。前者は私たちに一時的しあわせを保証しますが、後者は永遠のしあわせを保証します」（8-13）。

(i)男女の愛について作者は述べる。

女性は、神の栄光を話題にすると、男性よりも、愛の対象の善だけをさがす愛というあの激しい、明白に無私の情熱が一般的に可能である（9-7）。

(5)涙 (tears)

(a)ウエスタン氏がソフィアとブリフィルの結婚話の意図をソフィアに初めて打ち明けた場面で、

彼女は真珠が2・3個彼女の眼にしのびこむのをさまたげることではできなかった（6-7）。

(b)ジョーンズがソフィアの部屋にはいった時、ソフィアは
眼から涙をこぼし、唇からは血を流していた（6-8）。

(c)夕食後オールワージー氏がジョーンズを説教している場面で、

「おまえに対して非常に優しくて名誉ある振舞いをしてきた善良な若者(ブリフィル)」と言った言葉がジョーンズにとっては呑みこむにはあまりにも苦い一服であったので、涙がどっと彼の眼からあふれ出て、話すことも動くこともできないぐらいだった（6-10）。

(d)ソフィアがオナーの監視つきで自分の部屋（即ち牢獄）に閉じこめられている時、

オナーからジョーンズの手紙を渡されて2・3度読んでから、ベッドに体を投げ出して、わつと泣き出した（6-13）。

(e)ソフィアがウエスタン夫人と話をしている場面でソフィアは言う。

「あの可哀そうで不幸な人について私の考えがどうであっても、私は今の考えを墓場まで持つて行くつもりでした。今だけに安らぎのある墓場まで」ここで彼女は椅子に沈みこんで涙を流し、何とも言えない悲しみの沈黙の中で、一番冷酷な心にも影響を与えたに違いない光景を現した（6-6）。

(f)上記と同じ場面で、

ウエスタン夫人が怒って部屋から出て行くのをソフィアは止めて、夫人の足元に身を投げ出して、彼女の手を振りながら、今言ったことは父に隠しておくように涙ながらにお願いをした（6-6）。

(g)ブリフィルの手紙を読んだあとのジョーンズの心の描写。

沢山の相争う激しい感情がこの手紙によってわが主人公の心の中に起こされたが、優しさが怒りと短気をついに支配して、洪水のような涙が折よく彼を助けに来たので、恐らく彼のいろいろな不運が彼の頭を狂わせたり、彼の心を引き裂くことはなかっただろう（7-2）。

(h)ウエスタン夫人がソフィアにブリフィルとの結婚を促している場面で、

夫人に問いつめられたソフィアは夫人の膝に倒れこむと、彼女のきらきら光っている眼から涙がこぼれ出した（7-3）。

(i)ソフィアがウエスタン氏との話を終えて自分の部屋に帰ってから、ジョーンズからの手紙を何度も読む場面で、

ソフィアがマフも一緒に使いながら読んだので、マフも手紙も彼女の涙でびしょびしょになった（7-5）。

(j)丘の上の一軒家の主人の話。

「私の父が気を失って倒れた時、私は彼が快復するまで数分間両腕に抱いていた。父が快復した時、お互いにいつのまにか優しく抱き合っていた。その間涙がお互いの頬からとめどなくこぼれ落ちた（8-13）。

(6)情熱、激しい感情（passion）

(a)ソフィアの振舞いを推測した場面で作者は述べる。

もしソフィアがグロズヴェナー・スクエアの空気の中で10年生活していたら、もっとすばらしい振舞いをしていたかもしれないが、それにまさるとも劣らない振舞いであった。そのグロズヴェナー・スクエアとは若い貴夫人たちがロンドンから100マイル離れた森や林の中で、すごく真面目なものであるあの情熱でからかったり遊んだりするすばらしいこつを実際に学ぶ所である（6-3）。

(b)ソフィアが涙ながらにジョーンズのことをかばって言ったのを受けて、ウエスタン夫人がそれに同情するどころかますます怒って言う。

「何とまあ、こともあろうにあんな奴（ジョーンズ）に情熱を持っていると私の姪が断言するのを聞くために生きているなんて疑ってもみなかった」と（6-5）。

(c)上記と同じ場面でウエスタン夫人がソフィアに約束をする。

「あなたが名誉なんかで決して満足させられない情熱を持っていることがわかったので、ウエスタン家には迷惑にならないように出来るだけのことはします」と（6-6）。

(d)ジョーンズがオールワージー家から追い出された時、

自暴自棄になり、最も激しい苦悩に陥るが、しばらくして激しい感情の1番目であるその苦悩を吐き出した時、彼は少し我にかえった（6-12）。

(e)上記と同じ場面で、

ジョーンズはソフィアを我が物として彼女を不幸にするより、置き去りにした方がよいと決心した。彼の激しい感情に尊敬の念が勝ったことを考えて、彼の胸を一杯にした燃える暖かさと誇りが彼を快く喜ばせ、彼の心は恐らく完璧のしあわせを楽しんだだろうが、このような感情を経験したことのない人には理解しがたいことである（6-12）。

(f)ジョーンズがソフィアの手紙を100回以上読んで、100回以上口づけをしたあと、

彼の激しい感情は優しい願いを全部彼の心の中によみがえらせた。（6-12）。

(g)ソフィアと侍女のオナーがジョーンズについて話をしている場面でソフィアは言う。

「あの人は全く英雄的な美德と天子のような善のかたまり。私自身の感情の弱さを恥ずかしく思うわ」と（6-13）。

(h)ソフィアが家を出る前に父に対してとった態度について作者は言う。

彼女自身がこれから先どんなに苦しむことになるか、子としての愛や義務に対する犠牲または殉教者になるかを考えた時、彼女はある小さな情熱の中に快いくすぐりを感じた（6-9）。

4. 格言またはそれに類似した表現

(a)ウエスタン氏とウエスタン夫人が話している場面でウエスタン夫人が言う。

「彼女（娘）が選んだ正にその人があなた（父親）が彼女（娘）のために選ぶ正にその人になる」と私は信じる、と（6-2）。

この一言は『トム・ジョーンズ』という小説の伏線の一つになると思われる。

(b)召使いのオナーとソフィアが話をしている場面でオナーが言う。

「男の人がとてもふさわしい人であっても、女の人が彼を同じようにハンサムとは思わないかもしれない」と（6-6）。

(c)上記と同じ場面でオナーが言う。

「男の人全部が全部同じように好ましいとは限らない」と（6-6）。

(d)ソフィアとオナーが話している場面でオナーが言う。

「イギリスのどんな父親も娘を同意なしに結婚させるべきではない。たしかに郷土は非常に善良なので、もし娘が相手の青年を軽蔑し憎んでいると知りさえしたら、たしかに彼は二人の

結婚を望まないだろう」と(6-6)。

この考えも『トム・ジョーンズ』の伏線の一つである。

(e)作者は次の格言を使って現在のソフィアの心情と情況を表している。「不運は単独にはやって来ない」(6-7)。

愛する人(ジョーンズ)に会えなくてがっかりしただけでなく、嫌いな人(ブリフィル)の訪問を受けるために、ドレスの着がえをしなければならない悩みがソフィアにはあった。この二つを意味している。

(f)ウエスタン氏とサプル氏が話し合っている場面でウエスタン氏は言う。

「人は怒ると喉がかわく」と(6-9)。

(g)上記と同じ場面で、

「人の心は病気になると、いつもの厳格さから柔らかになり緩むものである」(6-10)。

(h)ジョーンズのソフィアへの手紙の中で、

「残酷さこそ運命から始まる」(6-12)。

(i)ウエスタン夫人とウエスタン氏が話している場面で彼女が言う。

「イギリスの女性は全然奴隷ではありません。私たちは男性同様に自由の権利があります。力づくで支配されるのではなく、理性と説得だけで納得させられるべきです」と(6-14)。

(j)上記と同じ場面でウエスタン氏が2回言う。

「人は誰も楽しくすごすべきだ。人は誰も楽しくすごすべきだ」と(6-14)。

(k)上記と同じ場面でウエスタン氏が言う。

「女は女を扱うのに一番適している」と(6-14)。

(l)上記と同じ場面でのウエスタン氏の格言。

「女は最初の料理と一緒にはいって来て、最初のグラスで出て行くべきだ」(7-4)。

(m)ウエスタン氏が妻を憎んでいたように、ソフィアを憎んではいなかった。これについて作者は述べる。

憎しみは妬みという媒介を通して愛の結果ではない。妬み深い人がその妬みの対象を殺すことは実際に可能であるが、憎むことはできない(7-4)。

(n)ウエスタン氏とソフィアが話している場面で彼は言う。

「女(の考え)は正しいが、男はいつも間違っている」と(7-5)。

(o)ソフィアと侍女のオナーが話をしている場面で作者は述べる。

女が一旦恋人のもとへ走って行くあるいは恋人から逃げる決心をしたら、障害物は全部つまらないものとして考えられる(7-7)。

(p)ジョーンズがブリストルへ行く途中出会ったクエイカー教徒が宿屋で話す言葉。

「私たちは皆死ぬものである」(7-10)。

(q)上記と同じ場面で、

「私たち皆が生まれたのは苦しむためである」(7-10)。

(r)ジョーンズが泊まっている宿屋の主人がジョーンズの案内人に彼の生い立ちを教えられて心配する場面で主人は言う。

「勘定をいただかないと、最初の損がいつも一番ひどい (best) 損である」と (7-10)。

(s)ある宿屋でそこのお上さんと客が話している時、お上さんの最初の旦那の話になって彼女は言う。

「私の主人は賢い人でよく言ったものです。外側で内側を知ることがいつもできるわけではない」と (7-13)。

(t)上記の宿屋で怪我人を治療した外科医は言う。

「私たちはみんな死ぬものであり、外科医の中で一番偉い医者でも予見できない兆候が治療にはよく起こるものです」と (7-13)。

(u)外科医とお上さんが話をしていて、外科医がジョーンズは死ぬかもしれないと言ったのに対して彼女は言う。

「人は誰でもいつかは死ななければなりません」と (8-3)。

(v)上記と同じ場面でお上さんの前の夫がいつも言っていたこと。

「どんなものも外見通りというわけではない」と (8-3)。

(w)上記と同じ宿屋のジョーンズの部屋で外科医が・・・ジョーンズを急に起こしたので、ジョーンズが不平を言ったのに対して外科医は言う。

「沢山の人が人生をうとうとと過ごして来た。睡眠はいつもよいわけではない、食物と同様に」と (8-3)。

(x)上記と同じ場面で外科医はジョーンズの治療費を請求するが、彼はいっせんも払わないと言ったのに対して外科医は言う。

「最初の損が一番よい損である」と (8-3)。

これは(r)の例と同じである。

(y)丘の上の一軒家の主人とジョーンズが話している場面で主人が

「あなたはこの地方の紳士でしょう。馬に乗らないで遠く旅をするのに慣れていない人のように見える」と言ったのを受けて、ジョーンズが言う。「外見はよく人をだましやすいですし、人は時には実際と違うものに見えるものです」と (8-10)。

(z)上記と同じ場面で主人はジョーンズに向かって言う。

「立派な顔立ちは推薦状であるというのを私は読んだことがある」と (8-10)。

(aa)上記と同じ場面で主人は言う。

「博愛は主として人間を避けたり憎んだりさせるものですし、個人的利己的悪徳のためではなくて類似したもの、例えば、悪意、裏切り、残酷、その他あらゆる種類の悪意の悪徳のために (避けたり憎んだりさせるものです)」と (8-10)。

(bb)上記と同じ場面で主人は言う。

「真実の学問の人、ほとんど普遍的な知識をもった人は他人の無知にいつも同情するが、何

かちょっと、程度の低い、軽蔑すべき技術にすぐれている人はその技術を知らない人を確かにいつも軽蔑します」と（8-13）。

(cc) 上記と同じ場面で主人は言う。

「人間の異なった風俗を知るために旅行する人はベニスのカーニバルに行くことによってあまり苦勞をしなくてすむかもしれない。というのはあそこではヨーロッパのいろいろな宮廷で発見できるすべてのものをすぐ見るから。同じ偽善、同じ欺瞞、要するに違った習慣を身につけた同じ愚かさと悪徳、スペインではこれらは莊重さをもって飾られ、イタリアでは壮麗さで、フランスではならず者はにやけ男のように着飾り、北の諸国では無精者のように。しかし人間性は到るところで同じであり、到るところで嫌悪と軽蔑の対象である」と（8-15）。

(dd) 上記と同じ場面で主人は言う。

「最高の存在（神）の最後にして最大の作品であり、この地球の王である人間だけが太陽のもとにいる。人間だけが自分自身の本姓をいやしく辱かして来た。不正直、残酷、忘恩、裏切りによって、慈悲深い存在がこのように愚かな、このように邪惡な動物をいかに形づくるかを説明するように私たちを迷わすことによって、人間の創造主の善を疑って来た」と（8-15）。

(ee) 上記と同じ場面でジョーンズが言う。

「實際あなたは誤りを犯しています。その誤りは私の少ない経験から、ごくありふれた誤りであり、一人の中で一番悪い、一番下品なものから人間の性格を取り出しているのです。一方すぐれた作家が書いているように、人間の一番善良で一番完璧な個人の中に発見されるもの以外に、人間の特徴として見なされるものは何もない」と（8-15）。

(ff) 上記と同じ場面でジョーンズが言う。

「悪を犯す多くの人が心の中で全く悪く墮落しているわけではない。実際に誰も人間性は必ず普遍的に悪であると主張する権利を持っているようには思われない」と（8-15）。

これは作者の人間性についての一貫した考え方の方である。

(gg) 作者の物語（histories）についての考え方（ホラチウスの考え方を引用して）。

ホラチウスは言う。「私を泣かす作家は彼自身まず泣くにちがいない。実際に人は誰も悲嘆を描きながら自分が感じない悲嘆をよく描くことはできないし、最も哀れで痛ましい場面は涙で書かれたことを私は疑わない」と（9-1）。

(hh) 友人同志の喧嘩についてパートリッジは言う。

「友人同志が喧嘩をする時唯一の方法は二人が好きなようにげんこつで、剣を持って、あるいはピストルを持っていたても、かなり友好的に、その喧嘩を最後まで見ることです。というのは私自身は友人と喧嘩をしている時よりも彼を愛しているのです。悪意に耐えることはイギリス人に似ているというよりフランス人に似ているのです」と（9-4）。

(ii) ジョーンズとパートリッジが立ち寄った宿屋の主人とお上の話の中で主人は言う。

「すぎてしまったことは改めることはできない。だから問題の終わりがあるのだ」と（9-6）。

(jj) 上記と同じ場面でパートリッジがお上に言う。

「偉い紳士には時々ユーモアがあることを私は知らない」と（9－6）。

5. 最上級表現とそのコンテキスト(1)

(a)愛に関する章で作者は述べる。

「愛は私たちの欲望すべての中で一番下品なものと同じぐらい愛そのものの満足を求める」
と（6－1）。

(b)こび・へつらいについて作者は述べる。

「人はこびる人の性格をどんなに軽蔑しても、甘んじて最も下品な方法で自分をこびない人はほとんどいない」と（6－1）。

(c)ソフィアの父がオールワージー氏の家を訪れるということをソフィアがおばから聞いた時の様子を作者は述べる。

ソフィアは顔には最大の喜びを浮かべ、態度には最高の華やかさで、ときどきするゆううつな心を隠す努力をした（6－3）。

(d)ウェスタン氏が娘の結婚話をオールワージー氏にもちかけた時、その返事が期待通りでなかったので、彼は軽蔑の気持ちで言う。

「両親は子供にふさわしい結婚の一番よい審判員ですし、親としては娘が一番従順であるべきです」と（6－3）。

(e)賢い人と英知について作者は述べる。

最も賢い人は人並み以上に世間的な祝福を一番持っているようである（likeliest）、というのは英知が規定するその中庸は役に立つ富への最も確実な道であるように、富は沢山の快樂を味わうように私たちに資格を与えることができるだけである。賢い人はあらゆる欲望やあらゆる情熱を満足させるが、愚かな人はすべてのものを犠牲にして欲望や情熱に無関心になったり、飽き飽きしたりするのである。非常に賢い人は評判が悪いぐらいに貪欲であったということに反対意見があるかもしれないが、私はその例において、否と答える（今賢い人はその時は賢くなかったのだ）。同様に、最も賢い人でも青年時代には快樂を人並はずれて好んだと言ってもよい。彼らはその時は賢くなかったのだと私は答える（6－3）。

(f)上記と同じ章で作者は続ける。

英知は、要するに、最低の生活においても普遍的に知られ従われる簡単な格言を実際よりも少し遠くまで広げることを私たちに教えているにすぎないのである。これは（品物を）高すぎる値段で買わないことである。

この格言を身につけて世間というマーケットへ持って行き、それを名誉や財産や快樂やその他の商品に絶えず応用する人は誰でも賢い人であると私は敢えて肯定するし、その（賢いという）言葉の世俗的な意味においてそのように認められねばならない、というのは彼は割安な買物を最大限に利用するし、実際に少し高い値段であらゆる物を買って、すべてよい品物を家に持ち帰るからだし、一方、彼は健康や純心な心や、評判や普通の値段を全く自分自身のために

維持するからである。

同様に、この中庸から、彼は自分の性格を完成させる二つの教訓を学ぶ。一つは、一番よい買物をした時でも決して有頂天にならないし、もう一つ、マーケットに品物がなかったり、品物が彼には高すぎる時でも決してがっかりしないからである（6－3）。

(g)ウェスタン夫人がソフィアの部屋に突然はいつて来た時、ソフィアは読んでいた本を隠すが、夫人がその本を取り上げて、

「私は読んだことはありません。だって一番すぐれた批評家がその本にはあまり内容がないと言っているから」と言ったのに対して、ソフィアが言う。「おばさま、私はあえて自分の意見は言いません。一番すぐれた批評家に反対するような意見は」と（6－5）。

(h)上記と同じ場面でウェスタン夫人が言う。

「私がすでに知っていることを、私が昨日はっきり見たことを私は言っているにすぎないのです。すべての見せかけの中で一番巧妙な見せかけで。あなたの見せかけは世間を完全に知らない人をだましたとしても」と（6－5）。

(i)上記と同じ場面でソフィアがブリフィルに会うことになったと夫人が言ってから、

「今日の午後だから、一番よい振舞いをするように」と言う（6－5）。

(j)上記と同じ場面で二人の話がもつれてしまってソフィアが取り乱すのであるが、

この優しい悲しみが叔母の心に同情を引き起こすどころか、逆に最も激しい怒りを引き起こすことになった（6－5）。

(k)上記と同じ場面でソフィアが言う。

「ブリフィル氏は私にとって決して好ましい人ではないので、無理に結婚して世界一のみじめな女になりたくない」と言ったのを受けて、夫人が言う。「私もいろいろ考えたけど、これが世界一で一番ふさわしい結婚だと今では見なしている」と（6－5）。

(l)ソフィアと侍女のオナーが話している場面でオナーは言う。

「お嬢さまがこんなに沢山の財産を持っておられることはどんな意味があるのですか、一番最もハンサムだと思う人が気に入らないとしたら。…お嬢さまの財産はどこでお使いになるのですか。だってあの人は世界で一番最もハンサムで、一番最もチャーミングで、一番最も素敵で、一番最も背が高く、一番最もふさわしい人だと誰もが認めるに違いないからです」と（6－6）。

(m)ブリフィルが帰ったあとすぐ、ウェスタン氏が娘の部屋に行く場面で、

彼はソフィアを見つけると、最も異常な喜びを表し、彼女を何度も何度も抱きしめて、一番親愛の情を表す名前で彼女を呼び、彼女が地上でたった一人の喜びであると断言した（6－7）。

(n)ウェスタン氏とソフィアが結婚について話をしている場面でソフィアが言う。

「娘の嫌いな男とむりやり結婚させて地上で一番みじめな女にしないで」「一番やさしいお父さんが私の心をめちゃくちゃにできますか」「一番痛ましい、一番残酷な、一番だらだら長びく死によってお父さんは私を殺すつもりですか」と（6－7）。

(o)ジョーンズとソフィアが話し合っている場面でソフィアがジョーンズに、

「私から永遠に飛び去って下さい、あなた自身の破滅を避けるために」と言ったのを受けてジョーンズが言う、「一番ひどい苦しみから私を救いたいなら、そんなむごい言葉は取り消して下さい」と(6-8)。

(p)ジョーンズとソフィアの結婚について作者は述べる。

ウェスタン氏の頭にはジョーンズと娘の結婚の考えは一度もはいつて来なかった、ジョーンズに対するウェスタン氏の一番暖かい数分間においても、疑いからも、どんなほかの機会にも(6-8)。

(q)オールワージー氏とブリフィルが話している場面でブリフィルは言う。

「ウェスタン氏の決心は私がどちらの側のしあわせも大きくするだろうし、最高の悲惨から守られる親(ウェスタン氏)のしあわせだけでなく、この結婚によって台なしになるほかの二人(ソフィアとジョーンズ)のしあわせも大きくするということを説明しています」(6-9)。

(r)夕食後オールワージー氏とジョーンズがいるところで、オールワージー氏は言う。

「ジョーンズの今までの悪い行いに対してジョーンズが明白に弁明できなければ追い出す」と言ったのに対して、ジョーンズは彼にとって何がこの世で一番大きな処罰であるかわからなくて、そんなことをしていなければよいと願った。(6-9)。

(s)オールワージー氏がジョーンズを家から追い出すことになった時、

近所の人は全部この裁きと厳しさを最高の残酷だと非難した(6-11)。

(t)ジョーンズが家を追い出されて、行くあてもなくさまよっていて、行く手を小川にさえぎられた時、

彼は一番激しい苦しみ落ちこみ、髪をかきむしり、狂気と怒りと絶望を伴うありとあらゆる動作をした(6-12)。

(u)ジョーンズのソフィアへの手紙の中で彼は言う。

「おお、ソフィアよ、あなたを置いて行くことはできませんし、あなたに私を忘れてほしいと願うことはなおさらできませんが、最も誠実な愛が私にその両方を余儀なくさせます」と(6-12)。

(v)女中のオナーがソフィアを監視する時、ウェスタン氏がした約束は

「オナーが約束を忠実に守ればほうびを沢山するし、もし信頼を裏切るようなことがあれば、処罰するという恐ろしいおどしで最も厳格な責任を与えること」だった(6-13)。

(w)ソフィアとオナーがいる場面でオナーが言う。

「もしイギリスで最高の男性が私に彼を忘れてほしいと言うなら、私は彼の言葉に従います。…もし私が生意気につまらない意見を述べるとすれば、若いブリフィル氏がいるということですから。正直な両親の生まれであり、このあたりで一番偉い郷士の一人になるというほかに、私のつまらない考えでは、あの人は半ばよりもっとハンサムでよりもっと丁寧な人だということですから。…もし頭をつけている最高の男性が侮辱するような言葉を言ったら、今後決してつきあう

ことはしません。この王国にもう一人若者がいても」と（6-13）。

(x)ウェスタン夫人がウェスタン氏と話をしている場面で、彼が娘を部屋に閉じこめていると言ったのに対して彼女は非難する。

「どうしてさしでがましいことをするのですか。あなたは男の中で一番弱い男です」と（6-14）。

(y)ウェスタン夫人がソフィアを結婚のことで説得しているのを部屋の外で聞いていたウェスタン氏が突然部屋に飛びこんできて、夫人を非難しはじめた場面で、

夫人は最も激しく怒って、ここに書けないような言葉を吐いて、たちまち家から飛び出して行った（7-3）。

(z)上記と同じ場面で、ソフィアは父の現在の気持ちを察して、父にうまく取り入るチャンスだったが、

彼女は最も愚かな女性でも財産として持っているあの役に立つずるさを欠いていたとは言っても、彼女は本当に感受性の強い女で、理解力は一流だったのだが（7-3）。

(aa)ウェスタン氏の妻はソフィアが11歳の時亡くなったが、

主人が飲みすぎるのに対して、わずかの機会を利用して最も優しい言葉で彼に忠告した（7-4）。

(bb)ウェスタン氏とソフィアが叔母について話をしている場面で彼がたずねる。

「おばさんが世界で一番悪い妹の役を演じて来たとは言わないだろうね」と（7-5）。

(cc)上記と同じ場面でソフィアは答える。

「おばさんとお父さんが考え方の点で非常に違っているというのは知っていますが、おばさんがお父さんに対して最大の愛情を表しているのを1000回も聞いたことがあるし、世界一の悪い妹どころかこんなに兄を愛している人はいません」と（7-5）。

(dd)ブリフィルとソフィアが会っている場面でブリフィルが言う。

「(私に) 一番優しくて、一番ふさわしいソフィアとの結婚以外にあなたの家族との結びつき同様にこんなに熱心に願っていることはこの世にありませんので、私の二つの最高の願いを持つことを私がどんなに待ちどおしく思っているか容易に想像できるでしょう」と（7-6）。

(ee)ソフィアが家を出る前のウェスタン氏のソフィアに対するすべての行為について作者は述べる。

ウェスタン氏の行為は一般の親のとり態度と同じだから読者は驚かないだろうが、万一驚いたとしても私は説明できない。というのは彼が娘を一番優しく愛していたことは議論の余地はないし、同じ行為（追い出すこと）によって自分の子供を最も完全にみじめにした他の親たちもそうであった。その行為が親にとってほとんど普遍的であっても、それはあの奇妙で巨大な男の頭の中にこれまで浮かんだあらゆる不合理なものごとの中で一番説明できないことのように私にはいつも思われて来た（7-9）。

(ff)クェイカー教徒が自分の娘についてジョーンズに話す場面で教徒は言う。

「私には娘が一人いて地上で最大の喜びでした」と（7－10）。

(gg) 上記と同じ場面で彼は言う。

「娘は私から恋人のもとへ逃げて行って、1時間以内に結婚してしまったんです。それは娘たち二人にとって最悪の1時間の仕事になるでしょう。というのは二人は飢えるかもしれないし、乞食をするかもしれないし、一緒に盗みをするかもしれないからです」と（7－10）。

(hh) 上記と同じ場面でクェイカー教徒は大声で呼ぶ。

「私だったらこの世で二つの最大の敵（娘とその主人）をすぐ呼びもどすでしょう」と（7－10）。

(ii) 上記と同じ場面でクェイカー教徒は

宿屋の主人が彼の客（ジョーンズ）に十分気を使って最高の丁寧さで彼をもてなすように願った（7－10）。

(jj) 作者が物語（history）を書く際の心構えについて述べる。

人間は（もし実際にあまり異常な場合でないならば）最高の主題であり、その主題はわが物語作家あるいは詩人のペンに現れるし、彼の行為を述べる際に、私たちは描写する人物の能力を越えないように大いに注意すべきである、と（7－1）。

(kk) 宿屋のお上さんとジョーンズが話をしている、ソフィアやオールワージー氏との関係についてジョーンズが言った時、わが善良なお上さんはこの関係に圧倒されて冷静に言った。

「たしかに人が一番よい審査員ですし、その状況に一番適しているものです」と（8－2）。

(ll) 宿屋の一室でジョーンズがソフィアの夢を見ながら眠っていた時、外科医に突然起こされたのに対してジョーンズは言う。

「私の人生の一番楽しい眠りからあなたは私を起こしてしまった」と（8－3）。

(mm) 宿屋でジョーンズが散髪屋のベンジャミンに一杯飲むようにもちかけた時、ベンジャミンは言う。

「あなたは私がこっけいな奴だと見やぶったように、もしあなたが宇宙で一番気立てのよい紳士でないならば、私には人相学の眼がないことになります」と（8－4）。

(nn) 宿屋の台所に夕食を食べにジョーンズは行ってみたが、まだテーブルの準備ができていなかった。そして太陽という部屋に通されるが、

そこはその宿屋で太陽のあたったことのない一番悪い部屋であった（8－4）。

(oo) 宿屋の一室でジョーンズと散髪屋のベンジャミンが話をしている場面でベンジャミンは言う。

「英語で書いてある一番よい本を数冊持っています。その中にはちょっと破れたものもありますが」と（8－5）。

(pp) 上記と同じ場面でベンジャミンの持っている本の作者について作者は述べる。

その作家（トム・ブラウン）はイギリスが生み出した最大の才知の一人だと見なしていた、と（8－5）。

(qq) 上記と同じ場面でジョーンズが給仕人にこのあたりに別の医者はいないかとたずねたのに対して給仕人は言う。

「この近所に手術の一番上手な人がいます」と (8-6)。

(rr) 上記と同じ場面でジョーンズがベンジャミンについて言う。

「あなたは確かに一番風変わりで、一番こっけいな人です」と (8-6)。

(ss) 上記と同じ場面でベンジャミンがジョーンズに冗談のように言う。

「あなた自身は私の最大の敵だったんです」と (8-6)。

この場面でベンジャミンは元のパートリッジだったことを告白する。

(tt) パートリッジとジョーンズが真冬の真夜中、月に照らされながらウスターに向かって歩いている時、険しい丘の麓にさしかかった場面でパートリッジが言う。

「丘の頂上がゆううつな考えを作り出すのに一番適当であるならば、麓は楽しい考えを作り出すのに一番ふさわしいと思います。…この丘の頂上は世界で一番高いように思われます」と (8-10)。

(uu) 丘の頂上の一軒家の入口でパートリッジが老女に話しかけている場面で、パートリッジは言う。

「どうぞ願いますから、数分でいいですから、火にあたらせて下さい。寒さでこごえ死にそうです」と最も熱心な嘆願をする。ついでにジョーンズについて「こちらの紳士は田舎で一番偉い紳士の一人です」と (8-10)。

(vv) 丘の頂上の一軒家の中は

最も整頓ができて、最高に美しい家具が備えつけてあった (8-10)。

(ww) 丘の上の一軒家の主人をジョーンズが助けた時主人は言う。

「食べものも飲みものもこれといったものはありませんが、一番うまいブランディをさしあげましょう」と (8-10)。

(xx) 丘の上の一軒家の主人 (別称「丘の男」) とジョーンズが話している場面で、主人が「あなたのその年でそんなに不幸になる理由が何かあるとはお気の毒です」と言ったのを受けてジョーンズは言う。

「実に、私は人間の中で一番不幸な男です」と。「恐らく友人や恋人がいるのでしょうか」と主人。「どうして私を狂わせるような言葉を言うのですか」とジョーンズ、「友人とか恋人とかいう言葉はどんな男でも狂わせるものです。もうこれ以上質問はしません。恐らく私の好奇心が大きすぎるからです」と主人。「実に今のこの瞬間最上級に感じる感情があります。私が初めてこの家にはいってから見たり聞いたりしたものはことごとく最大の好奇心を呼び起こしました」とジョーンズ (8-10)。

(yy) 上記と同じ場面で主人はジョーンズに助けてもらったことについて言う。

「もし私があなたに対して何らかの憧れを感じないならば、私は地上で一番忘恩の怪獣にちがいないし、私の感謝の気持ちを言葉で表すことは全然できません」と (8-10)。

(zz) 上記と同じ場面での主人の話。

「私の兄は15歳の頃、銃の使い方が上手だったし、兎のを見つけ方もすぐれていたもので、田舎で一番上手なスポーツマンという評判をとり、その評判を兄も楽しんでいました。まるで一番できる生徒と考えられていたかのように」(8-10)。

(aaa) 上記と同じ場面で、

「私の兄は勉強がらいで学校をやめることになるけど、逆に私は勉強はどんどん進むし、仕事は楽になるし、運動は楽しくなったので、休日は私の一番不愉快な時になりました。というのは母は私を全然愛していなかったし、私の姿を見るのも憎んでいたし、母のために自分の家が私にとっては非常に不愉快なものでしたので、児童・生徒がよく言うように、ブラック・マンディは私にとっては一年中最も白い月曜日でした」(8-10)。

(bbb) 上記と同じ場面で、

「自分の今までの人生を振り返ってみると、最も善良な父に与えた悲しみなどを反省すると、私の心の恐怖は大変なもので、人生がもっと長く望ましいものになるどころか、私の嫌悪の対象になり、もし死が恥も外聞もなく自分で選べるものだったら、喜んで死を最愛の友人に選んでいたでしょう」(8-10)。

(ccc) 上記と同じ場面で、

「これらの作家（アリストテレスとプラトン）は、私にどんな学問も教えなかったし、その学問によって最も少い富や世俗的な力を得ることを自分に約束するかもしれませんが、この作家たちは両方の最高の獲得を軽蔑する術を私に教えてくれました。…富も力も知恵の知識を教えこむだけでなく、もし私たちが最大の世俗的幸福に到達しようとするなら、これ（知恵の知識）が私たちの案内役になるにちがいありません。…」

「最も賢い異教徒によって教えられた哲学はすべて一つの夢にすぎないし、夢を表現する最も愚かなおどけ者と同様に虚栄に満ちあふれているという研究を私はしました。…天そのものが甘んじて私たちに現したいろいろなもの、その一番小さな知識にさえも最高の人間的機知はある助けがなければ、決して登ることはできません。私は一番すぐれた異教徒の作家たちと一緒に過ごしたすべての時間は徒労にすぎないと今考え始めました。…聖書に表された栄光にくらべるとき、彼ら（作家たち）の最高の書類はつまらないものに見えてきます。」…

「私自身にとって一番楽しいやり方でおよそ4年間を過ごし、全く思索にふけり、世事に全く悩まされない、その時最高の父を亡くしたのです。父の死に対する私の悲しみはすべての描写を越えるほど私が全く愛していた父を。…しかしながら、心の最高の医者である時間がついに私に安堵をもたらしたのです」(8-13)。

(ddd) 上記と同じ場面でワトソンが丘の男に言う。

「もしあなたが私に10ギニー貸してくれる人を見つけることができないなら、私は首つりをするか溺死するか餓死するかいずれかに違いないけど、私の考えでは、最後の死が三つのうちで一番恐ろしい死です」(8-14)。

(eee) 上記と同じ場面で丘の男が言う。

「この薬屋は現代の一番偉い政治家だった。彼は一番よい患者よりも一番つまらない大金を喜んだし、それが彼にできる最高の喜びであった」と (8-14)。

(fff) 上記と同じ場面でジョーンズが口をはさんで言う。

「あなたの言うことは本当に真実だ。歴史的に一番すばらしいものとして私を感動させました」と (8-14)。

(ggg) 上記と同じ場面でジョーンズは丘の男に言う。

「実際あなたは間違っています。私の短い経験から言うと、人間の一番悪い、一番下品な性格から人間の性格をとることによって一般的な間違いをしているのですが、一番善良で、一番完璧な人の間で発見されるもの以外に人間の特徴として尊敬されるものは何もない」と (8-15)。

(hhh) 上記と同じ場面でジョーンズは言う。

「私はこの世でほんの短い間生きて来ましたが、男性は最高の友情の価値があるし、女性は最高の愛の価値があります」と (8-15)。

(iii) ジョーンズと丘の男が歩いている場面で、

二人がマザード丘の頂上に着くと、世界で一番気高い眺めが二人の前に現れた (9-12)。

(jjj) 上記と同じ丘の上で、

二人は少し離れた下の森の中から流れてくる最も激しい女の叫び声を聞いた (9-2)。

(kkk) 上記と同じ場面で (ジョーンズが助けた女性は上半身裸のような状態だったので)、

ジョーンズは彼女に自分のコートを差し出したが、最も熱心な勧誘を絶対に拒絶したので、どんな理由なのか私 (作者) にはわからないと述べる (9-2)。

(lll) ジョーンズと彼が助けた夫人が町にはいる場面。

ジョーンズと美人の連れが町にはいるとすぐ宿屋に行ったが、そこは二人の眼には一番美しい外観をしていた (9-2)。

(mmm) ジョーンズが見つけた宿屋で、

お上は二人が宿屋にはいったという知らせを受けると、二人を追い出すための一番手っとり早い手段を考え始めた (9-3)。

(nnn) 上記と同じ宿屋で、ジョーンズと夫人を宿屋に入れたことで一騒動が起こるが、さいわいに新しい二人づれの女の客が来たので一件落着する。

お上は二人をすぐ招き入れるが、そこは最初ジョーンズと夫人がはいっていた部屋でこの宿屋の一番よい部屋であった (9-3)。

(ooo) 英雄 (主人公) についての作者の考え。

英雄の心がどんなに高尚であっても、その体は最悪の弱点に陥りやすいし、人間性の最悪の家事室を条件としている。後者の中で食べる行為は哲学的威厳からは極度に苛しく傷つけるものとして賢人に考えられて来たが、この世で一番偉い王子、一番偉い英雄、一番偉い哲学者に

よってもある程度演技されねばならない (9-5)。

(ppp) ジョーンズとパートリッジが立ち寄った宿屋で、パートリッジがジョーンズについてお上に言う。

「私の友人は王国で一番偉い紳士であるとあなたに約束する。彼はオールワージー郷士の跡継ぎである」と (9-6)。

(rrr) 上記と同じ場面でパートリッジは言う。

「私たちはあそこで (丘の上で) 一番奇妙な男に出会った」と (9-6)。

(sss) ノーザートン氏とウォーターズ夫人との関係について作者は言う。

私たちは余儀なく事実を述べるが、被創造者の一番美しい部分に不利益を与えるように何らかの論評を加えることによって私たちの本性に余儀なく暴力を与えたりはしない、と (9-7)。

(ttt) 作者のウォーターズ夫人についての考え。

ウォーターズ夫人が女性の中で一番弱い階級でないことが彼女にとってさいわいだった (9-7)。

6. 最上級表現とそのコンテクスト(2)

この項の最上級表現は ‘not the least + n’ の例である。

(a) ウェスタン夫人がソフィアに抱いている疑いを隠そうとする場面で、
彼女は可哀そうなジョーンズに終日全然注意をしなかった (6-3)。

(b) ブリフィルのソフィアについての考え方を描写している場面で、
ソフィアの魅力はブリフィルに全然印象を与えなかったし、彼の心は以前から動いているわけでもないし、彼は美について全く鈍感であったし、女性に対して嫌悪を抱いていた (6-4)。

(c) 上記と同じ場面で、
彼の心の中にも体の中にもあの激しい感情のひとかけらもなかった (6-4)。

(d) ソフィアが父に会ったあと、ソフィアがブリフィルに会う心構えについて、
彼女はできるだけ決然とした態度で、父には全然疑いを与えないで、その不愉快な午後を過ごす決心をした (6-7)。

(e) ブリフィルはソフィアとの結婚のことで、
ジョーンズには全然妬みさえ抱いていなかった (6-7)。

(f) ウェスタン氏は娘がブリフィルに会うことに大変満足して応接間をはねまわる場面で、
彼がはねまわるのは自分の情熱を抑える力を全然もっていなかったからだし、彼の心の中でいつでも優勢だったものが彼を最高にかりたてたからである (6-7)。

(g) 宿屋の一室でジョーンズと散髪屋のベンジャミンが話している場面でベンジャミンは言う。
「あなたに会ってすぐわからなかったのには驚いているが、あなたは全然変わっていない」
と (8-5)。

7. ま と め

以上『トム・ジョーンズ』の全作品のうち大体4分の1を見て来たが、各項目について実例を紹介するだけで、私の考えを述べる時間的余裕がなかった。残念なことに、今回の論文ではソフィアが途中から姿を消してしまったので、ジョーンズとソフィアとの恋の発展、進展は見られなかった。

前回の論文の6.まとめの最後で「二人の恋は始まったばかりである。これから先、物語がどのように展開するか、二人の恋が、愛が、どのように発展するか優しく温かくかつ注意深く見守りたいと思う。」と書いたのだが、女主人公が姿を現さなくなったので、恋の、愛の発展が全然見られなかったのはいささか気がかりな点ではある。

しかし、次回、そして最終回がどのように展開するか期して待ちたいと思う。

(1996年5月8日受理)